

日本語学習教材として CLIL のアプローチから小学校教科書の活用を考える

—算数の教科書を中心に—

リス

1. はじめに

本稿は、タイの日本語教育を改善するための指導法や教材開発を試みたものである。まず、最初にタイの高校の日本語教育に関する状況をゴーマラタット (2005) を参考に説明していく。まず、タイでの日本語教育の特徴は、学習者が理解できるように媒介語として学習者の第一言語である。タイ語で指導することである。また、タイの高校の学習指導要領を用いて文法の指導が強調されている。学習内容は、日常生活に必要なことが中心に置かれている。指導では、講義形式による文型積み上げで文法訳読法である。日本の英語教育と同様に四技能を高めることを目的とする。まず、聞く力を高め、次は、話す力、読む力、最後は書く力という順番に能力を高めていく。教材を活用することは少なく、注として、教師の説明により、授業が進められていく評価方法は、それぞれの学校が基準を定め、絶対評価を行っている。ICT等の活用もあまり見られないのが実情だ。教育課程で学んでいない者の多く、教育に関する知識を身につけていない場合もある。日本語教員に関する一番大きな問題であると指摘されている。さらに、教育研修の機会の不足も挙げられている。

JAPAN FOUNDATION (以降.JF とする) は、2010 年、タイの中等教育で日本語を教える、約 100 名のタイ人の教師対象に、アンケートを実施した。アンケートの質問は以下の 3 つである。

1. タイの、特に中等教育の日本語学習者にとって、オーラル・コミュニケーション能力の育成は重要だと思いますか。もし、重要だと思う場合、その理由を書いてください。
2. オーラル・コミュニケーション能力向上のために意識して、どんな授業をしているか。

3. 授業でコミュニケーション能力の育成を行うとき、問題を感じることはどのようなことか具体的に考えてください。

JF は、また本調査の結果を以下の様にまとめている。タイ人の日本語教師の意見によると、日本語学習の目的は、コミュニケーション能力を育成することである。そして、日本語教育で一番大切なことは、話す力である。多くのタイ人の日本語教師は、タイ人の日本語学習者にコミュニケーション能力が必要だと思っている。

しかし、タイ人生徒が日本語でコミュニケーションをとるにあたり問題点がある。JF は、指摘している。そして、その問題は、コミュニケーション環境が関係している。例えば、「せっかく学習しても、実際に日本語を使う機会がない」という日本語の使用環境に関するもので、全体の半数以上の教師が指摘していた。次にコミュニケーションを中心とした活動を授業に取り入れたくても、「なかなか時間が取れない」と感じている教師も半数近くいた。他には、「生徒を動機付けるのが難しい」、「適切な教材がない」、「大学入試と関係がない」、「成績評価が難しい」、「一クラスの生徒数が多すぎる」、「教師の能力不足」などが挙げられている。

さらに、同調査の結果によると、タイ人の日本語教師は、生徒が日本人とコミュニケーションをとれるようになること、また、生徒に日本語を話すことに自信を持つようになることを望んでいる。しかし、様々な問題があるために、教師が一生懸命、日本語指導しても、日本語で生徒は、コミュニケーションをとる機会は少ない。

さらに、内田（2009）もタイの日本語教育の状況について以下のように述べている。

「皆さんの学校では、一週間に何時間日本語を教えているだろう

か。そして、どんなカリキュラムで教えているか。タイの中等教

育機関では、学校によって、何を教えるかを任されている。そう

はいつでも、自分で教える内容を決めるのは大変なので、テキスト

の内容を教えている先生が多い。（内田、2009、PP. 15-16）

タイの日本語教育は教科書を用いて教え、教師はタイ語で文法、単語を説明している。この指導方法は、文法や単語の学習には効果的であるが、生徒が日本語でコミュニケーションをとる機会を十分に提供することに重きが置かれていない。ゆえに、教師は、生

徒のコミュニケーション能力を育成するために、新しい指導法を取り入れて日本語のコミュニケーションをとる機会を増やすようにしている。そこで本研究では、近年ヨーロッパの外国語教育の新しいアプローチとして注目されている CLIL (Content and Language Integrated Learning) に着目した。CLIL がタイの高校にの日本語教育に応用可能かを探りたい。CLIL は、教科書教育と言語教育の統合型学習のアプローチである。コミュニケーションの機会が乏しい。タイ高校のために、学校教育の場で学ぶ活動を通して日本語のコミュニケーション場面をデザインできないかを考えたためである。

2. CLIL の先行研究

2.1 CLIL とは

CLIL とは、ヨーロッパで普及している理科や社会などの科目的内容と言語を統合した学習のことで歴史は長いが最近注目されている学習形態で、かつ有効な指導法 (methodology) と言える。(内藤、2015、PP. 1)

CLIL は内容言語統合型学習 (Content and Language Integrated Learning) の略語で「クリル」と読む。内容 (社会や理科などの教科ないしは時事問題や異文化理解などのトピック) と言語 (実質的には英語) の両方を学ぶ教育方法である。

2.2 CLIL の特徴

CLIL の学習は、日本語及び内容が理解できるように、日本で様々な内容を学習するアプローチである。従って、CLIL は、特別な特徴がある。CLIL の一番の特徴は「4つのC」で授業が組み立てられていることである。それは、Content、Communication、Cognition、Community/Culture である。「4つのC」とは、Content (科目やトピック)、Communication (単語・文法・発音などの言語知識や読む、書く、聞く、話すといった言語スキル)、Cognition (様々な思考力)、Community ないし Culture (共同学習、異文化理解、地球市民意識) のことを表している。このうち、Cognition が最も重視されている。注) 2

2.3 CLIL の 10 大原理

(1) 内容学習と語学学習の比率は 1 : 1 である。

- (2) オーセンティック素材（雑誌、新聞、インターネットなど）を利用知る。
- (3) 文字だけでなく、音声・視覚（映像、図、数字など）になる情報を多く用いる。
- (4) 様々なレベルの思考力（創造、評価、分析、応用、理解、暗記など）を用いる。
- (5) タスクを多く与える。
- (6) 協同学習（グループ活動、ペア活動など）を重視する。
- (7) 内容と言語の両面での足場（学習の手助け）を準備する。
- (8) 異文化理解、国際理解、比較文化などを取り入れる。
- (9) 4技能をバランスよく統合して使う。
- (10) 学習スキルの指導を行う。

CLIL は、内容学習と語学学習の比率が 1:1 である。内容も日本語も生徒に対して適切な内容を指導する。内容学習は、日本語の教科書だけではなくて様々な素材も使える。例えば、新聞やウェブサイトなどを利用できる。さらに、内容学習は、文字だけではなく、音声、数字、図版、映像を用いる。

語学学習は、コミュニケーションをとる機会が増やすので、協同活動（グループ活動やペア活動など）を利用できる。様々なレベルの思考力を用いる。例えば、暗記、理解、応用、分析、評価、創造などです。さらに、4技能（話す力、聞く力、読む力、書く力）をバランスよく統合して使う。学習スキルの指導を行う。その上に、異文化、国際理解、比較文化について取り入れる。

CLIL は、コミュニケーションをとる機会を増やす学習である。それは、教師は、日本語でコミュニケーションをとることが必要です。タクスを使用できる。教師は、CLIL の授業の前に、内容と言語の両方を準備できる。

2.4. 日本語教育への応用例

まず、CLIL に関するこれまでの研究を見ていく。CLIL で日本語学習の研究について以下のように述べている。

清水（2016）は、言語教師が内容を扱う際に注意点が多い。歌舞伎と茶道を内容として学習した。歌舞伎は日本文化総合的術である。茶道も日本文化の総合的教養であり、そこには、両者の共通点がある。実践の結果は、教員も学習者も従来の授業と異なった学習法が生まれ、CLIL の可能性が示された。

佐藤・宮本（2014）は、CLIL を用いた日本語学習は、具体的な日本語を理解するようになった。生徒が四技能のスキルが伸ばして、学習に必要なスキルを身に付ける機会が増やした。さらに、CLIL のアプローチの授業は、作文や読解だけではなくて、日本語能力も向上された。従って、CLIL を作文と読解の授業に取り入れることは可能である。（佐藤・宮本、2014、PP. 1）

3. 研究の目的と方法

研究の目的は、CLIL においてタイ高校の日本語教育に応用するために、小学校の算数教科書の内容を分析することである。

そこで本研究では、研究方法について以下のように述べている。

1. タイの日本語教育について問題を観察する。
2. CLIL のアプローチについて勉強する。
3. 研究のために、日本の教科書を選択する。
4. CLIL のアプローチにおいて日本語教育の応用を分析する。
5. 分析した後、結果をまとめる。

本研究は、タイの日本語教育について問題を観察する。日本語を学習しても、実際に日本語を使う機会がない問題が起きた。従って、問題を解決するために、適切な学習法を探し、CLIL のアプローチについて勉強する。それから、日本の教科書を選び、算数教科書を決めた。なぜなら、日賞生活に不可欠基本的な算数の知識で、小学校の算数教

科書が日本語の簡単な単語や文法が使用されているからである。それから、CLIL のアプローチにおいて日本語教育の応用を分析する。分析した後、結果をまとめる。

4. 教科書の分析

4.1 教科書の選出

まず、なぜ算数の教科書の分析を行ったのかについて説明したい。数学的リテラシーの基本である加算減算は、日常生活に不可欠基本的な算数の知識である。タイの学校教育では、小学校2年生で学ぶ算数学習項目である。従って、タイ人の高校生は、誰でも、日本の小学校算数の教科書の足し算引き算に関わる絵を見ると、小学校の知識で理解できる。タイの高校日本語学習者の中で日本語があまりできない生徒も学習内容に関しては、問題がない。さらに、算数の小学校の教科書は、日本語の簡単な単語や文法が使用されているので、タイ人の日本語学習者にとっても、日本語が理解しやすい。

本研究では、タイ高校日本語教育に CLIL を応用する可能性を探るために、文部科学省検定学校算教科書の分析を行った。紙幅の関係上ここでは、単元たすのかなひくのかなの「しょうがっこうさんすう1ねん」以下に示す。学校図書が出版した「しょうがっこうさんすう1ねん」の分析した。

たすのかな ひくのかな

1. さるは、ぜんぶで なんびき いるでしょうか。
2. りんごが 16こ ありました。ぞうが 7ごたべました。のこりは、なんこになるでしょうか。
3. ペンギンが しまに 8わ います。3わ くと なんわに なるでしょうか。
4. とらと ライオンでは、どちらが なんと おおいでしょうか。
5. 山のぼりを して います。あやさんは まえから 6ばん目です。あやさんのうしろには 3人 います。みんなで なん人 いるでしょうか。
6. 10人で うしを 見て います。けんたさんは 左から 4ばん目です。
けんたさんの 右には なん人 いるでしょうか。

4.2 教科書分析の観点

Content

教科書の内容は、小学校の加算減算について学習する。タイの高校日本語学習者が小学校の知識で理解できる。タイの高校日本語学習者の中で日本語があまりできない生徒も学習内容に関しては、問題がない。タイの高校生は、足し算引き算が理解しやすい。日常生活に利用できる。

Communication

タイの日本語教育は、多くの学校が高校から指導する。それは、日本語の文法や単語や漢字が簡単である。日本の算数の小学校の教科書は、簡単な日本語を使用されているので、分かりやすい。この内容の単語は、動物名、助数詞について学習する。それは、「みんなの日本語」という日本語教科書の第11課の内容は、助数詞について指導するので、日本の小学校の教科書を指導すると、コミュニケーションをとる機会がふやすことができる。従って、この内容は、初級のタイの高校日本語学習に適切になることである。

Cognition

タイの高校で使用している日本語教科書の『みんなの日本語』には助数詞についての扱われている。しかし、タイの日本語教科書は、文法と単語を説明するが、状況に助数詞の使用し方し少なく説明してある。日本の教科書も一緒に用いて、タイの生徒がよく理解できるようになる。

Community/Culture

日本の教科書は、多くの日本人の生活や日本の文化が書かせているので、タイの高校日本語学習は、日本の教科書を通じて日本文化や異文化が理解できるようになる。この教科書の内容は、日本人の遊びが動物園に遊んだり山登りをしたりすることについて分かるようになる。

4.3 分析結果と考察

Content	Communication	Cognition	Community/Culture
<p>①この内容は、足し算引き算というテーマである。それは、基本的な数学である。</p> <p>②足し算のは、ものが二つ（または、二つ以上）を付け加えることである。</p> <p>③引き算のは、ものを引き出すことである。</p>	<p>①学習の言語 さる、びき、りんご、ぞう、のこり、こ、ペンギン、わ、とら、ライオン、とう、多い、山登り、後ろ、左、右</p> <p>②足し算の質問 全部でなんびきになるでしょうか。 みんなでなん人もいるでしょうか。</p> <p>③引き算の質問 ～と～では、どちらがなんとうおおいでしょうか。 のこりは、なんこになるでしょうか。</p>	<p>①算数（足し算引き算）を日本語で文章題を解く。</p> <p>②この内容は、たす、ひくのことについて指導する。</p> <p>②単語は動物名助数詞などである。 日本語の助数詞（こ、わ、とう、人という助数詞） “こ”は、小さい物の助数詞である。 “わ”は、鳥類の助数詞である。 “とう”は、大きい動物の助数詞である。 “人”は、人の助数詞である。</p> <p>③内容は、足すこと、引くことについて学習することである。</p>	<p>①日本には、様々な動物園が多くある。 ほとんど県毎に動物園がある。タイと比べて、大きい町しか動物園がない。タイの田舎の人が動物園に見学する機会が少ない。</p> <p>②日本の動物園の動物は、タイと比較してだいたい同じである。 さる、ぞう、とら、ライオンをよくみられる。でも、ペンギンは、タイの動物園があまりみられない。ペンギンは、寒いところに住んでいるので、タイにいつも暑くて住みにくい。</p>

Contentの方は、加算成算について学習する。基本的な数学である。動物園の中で活動がある。

Communicationの方は、日本語の単語、文法、漢字である。名詞の言葉は、さる、りんご、ぞう、ペンギン、とら、ライオン、山登りである。助数詞は、ご、わ、とう、人である。そして、位置の単語は、うしろ、右、左である。加算成算の言葉は、ぜんぶで、のこりである。その単語は、タイの高校日本語学習者のレベルが学習されている。

足し算引き算の質問は、足し算の質問は、「ぜんぶでなんびきになるでしょうか。」と「みんなでなん人もいるでしょうか。」である。引き算の質問は、「～と～では、どちらがなんとなく多いでしょうか。」と「のこりは、なんこになるでしょうか。」である。

Cognitionの方は、この内容は、足し算引き算について指導する。単語は、動物名、助数詞などである。日本語の助数詞は、「こ、わ、とう、人」である。“こ”は、小さいものの助数詞である。“わ”は、鳥類の助数詞である。“とう”は、大きい動物の助数詞である。“人”は、人の助数詞である。

Community/Cultureの方は、日本人が休みの日に様々な場所に遊びに行くのが好きなことである。日本人には、動物園が多くある。どんな県でも動物園がある。タイと比べて、大きい町だけ動物園がある。例えば、バンコク、チェンマイ、ナコンラッチャシー、ソクラーなどである。田舎の人は、テレビで動物園を見られる。日本の動物園の動物は、タイと比較して、だいたい動物が同じいる。したがって、さる、ぞう、とら、ライオンをよく分かる。しかし、ペンギンは、タイの動物園にあまりいないので、教師がペンギンについて説明がひつようである。

一般的にタイの日本語指導では、文法や単語などは、説明することが中心の講義形式による文型積み上げで文法訳読法である。したがって、CLILに基づく日本の小学校の教科書を学習するのは、内容が理解できるし、日本語の単語も文法も漢字も初級のレベルなので、学生ができるようになって興味がありそうである。最初に日本語とタイ語で説明して、これから、日本語がだんだんコミュニケーションをとる機会を増やす。タイの高校日本語学習者が日本語のコミュニケーションをとる機会を増やして、日本語を話したがるようになると思う。その上に、日本語と内容知識ができるようになる。

5. まとめ

本稿では、日本語学習材料としてCLILのアプローチから小学校教科書の活用を考えることについて報告する。CLILのアプローチの活用について算数の教科書を活用する

際の注意点は、CLIL が学習内容と語学学習の比重を等しくするアプローチで、最初に学習者ができないと考えるが、日々の授業でルーチン化しがらな教師と学習者の力量を高めてくれると信じである。従って、タイ高校の日本語教育に対し活用できるようになる。CLIL アプローチで日本語学習を用いるのは、日本語でコミュニケーションをとる機会を増やして、学生が日本語が理解できるようになる。そして、日本語を話すことに自信をもっている。従って、タイの高校の日本語の授業に CLIL のアプローチを用いることが可能性があるでしょう。

引用

注) 1 独立行政法人 国際交流基本バンコク日本文化センター (2011) 「JF 日本語教育スタンダードとタイの日本語教育」『タウン』、53号、1-2 ページ。

注) 2 CLIL Japan for Primary Education (2014) "What' CLIL?"、

<<http://primary.cliljapan.org/what-is-clil/>> (2016年6月20日)アクセス 閲覧。

参考文献

独立行政法人 国際交流基本バンコク日本文化センター (2011) 「JF 日本語教育スタンダードとタイの日本語教育」『タウン』、53号、1-2 ページ。

山野 有紀 (2013) 「小学校外国語活動における内容言語統合型習 (CLIL) の実践と可能性」『STEP BULLETIN』、第25号。

内勝 徹 (2015) 『CLIL を利用した英語教育』、7-9 ページ。

ソムポン・ゴーマラタット (2005) 『第2言語として日本語の学習文化の比較：日本の大学とタイの大学』、1-2 ページ。

佐藤 雅彦・宮本 律子 (2014) 「CLIL を用いた日本語教育の試み」『秋田大学教育文化学部教育実践研究紀要』、第36号。

清水 順子 (2016) 「CLIL 理論に基づいた「日本事情」の可能性」『北九州市立大学国際論集』、第14号。

CLIL Japan for Primary Education (2014) "What' CLIL?"、

<<http://primary.cliljapan.org/what-is-clil/>> (2016年6月20日)アクセス 閲覧

